

G^{ギュー}GEW

5 MAY
2022
vol.531

gew.co.jp

ゴルフ産業を社会に広める
ネットワーク・マガジン

Golf Economic World

SPECIAL FEATURE

「タバコ事情」から見る
健康産業としてのゴルフ

立たされる。これを両立させるには分煙化と相互理解が不可欠だ。荒木社長がこう続ける。

「とにかく分煙化の必要性を丁寧に説明したのです。喫煙所の設置は1台100万円近く掛かっており、正直痛手でしたけど、分煙後も来場者の減少はなく、逆に『快適に練習を楽しめるようになった』という声が増えています。今、空前のゴルフチームでウチも大変賑わっていますが、分煙化しなければ女性や若年層の獲得は厳しかったと思いますね。タバコを吸う人、吸わない人、双方の思いやりが大事でしょう」

図らずも、分煙化が新規客獲得の原動力になったという話。対立よりも融和が大切——。そのことを表わす好例といえる。

ゴルフ場もタバコ対策に前向きだが、施設内での「全社員禁煙」、しかも禁煙外来に通院すれば補助金1万円を出すとはいきった施策を打った

のが、従業員約300名を抱える鹿沼グループである。

同社はゴルフ漫画「風の大地」で舞台となった鹿沼CC（栃木県）など3コースを運営しているが、2020年2月に大幅な組織変更を行い、これを機に全社員に通達を出したものの、2か月後に健康増進法の施行を控えるタイミングだった。

置きタバコでボヤが発生した

同社人事本部の鈴木義之本部長が当手を振り返る。

「通達を出した時点で、全従業員300名のうち喫煙者は77名でした。実施は昨年4月1日からで、通達から1年間、喫煙者19名を対象に各コースで毎月『卒煙』に関わる面談もしたんです。禁煙外来に通院する場合は、会社が全通院に上限1万円を支給する補助金制度も立ち上げました

が、利用者はゼロでした」

背景には健康増進法と組織変更があったという。ゴルフは健康産業でもあり、まずは権より始めよ、ということで、会社が率先する方針を固めた。組織変更により、取締役が3名から4名、管理職（部長・支配人等）が14名に増え、要職を務める社員の健康意識を高めたかった。これ以外にも、

「社内の喫煙者に対して、陰で『タバコ臭いよね』という声もありましてね……（苦笑）」

喫煙者は自分のタバコ臭に気づかないが、周囲の非喫煙者は臭いに敏感だ。それが微妙な嫌悪感につながりコミュニケーションに支障を来たせば、会社にとってマイナス要因。思いついた決断の裏側にはいくつもの理由があったようだ。

一方、来場者への対応はどうなのか？ 系列の栃木が丘GCでは5年前、ティーイングエリアでの置きタバコが原因で、

「ボヤが発生したのです。コース内の分煙や灰皿の撤去について、理事会やフェローシップ委員会で諮ったところ賛否両論ありましたが、結局は理解して頂きました」

特に乾燥期のゴルフ場では山火事

が心配のタネ。コース管理の従業員からヒアリングを行って、状況に合わせた修正を加える。喫煙は健康問題にとどまらず、防火対策にも関わってくる。

一昨年「日本オープン」、今年9月に「日本女子オープン」を開催する紫CC（千葉県）もコース内の灰皿設置数を減らしている。

同コースは会員制の「すみれ」（18ホール）とセミパブリックの「あやめ」（36ホール）があり、「あやめ」は各ティーイングエリアとカートに灰皿、「すみれ」はキャディの手押しカートと場所に余裕があるティーイングエリアに灰皿を設置。同コースを運営する紫興業の小沼康弘部長（営業企画部）によると、

「灰皿の設置場所を減らすことに、愛煙家の会員からクレームはありませんでした。時代が時代だけに『仕方がない』という感じでしょう。ハウス内の売店は国際興業の管轄ですが、タバコの販売は減っていると聞いています。タスポの所有者が少なく自販機もない。売店で細々と売っている状況だと思います」

従業員の喫煙場所は各コース2か所だが、前述の大会を開くときは大会関係者とギャラリー向けに喫煙所

「タバコ事情」から見る健康産業としてのゴルフ



千代田カントリークラブ シミュレーションゴルフ個室 (写真提供: PGM)

渋滞に遭遇したり、コースに着いてから忘れ物に気付いたり、とかく予想外のこと起きて、バタバタしやすい。ドライビングレンジまで離れていると、その往復時間でイライラしたり、場合によっては練習を断念する羽目になることも少なくない。

しかしクラブハウス内にあるシミュレーターであればそういうリスクも最小限で食い止められる。それだけではない。シミュレーターには多くの打ちっ放し練習場にはない利点があるのだ。前出の広報グループの話。「ゴルフゾン社製の、最新のシミュレーターです。シミュレーターのいいところは自分の正確な距離が把握できますし、今のショットがこすり球であったのか、フックしたのかも分かること。また、正面と後方からのスイング録画も見られるので、客観的なスイングチェックもできます」。各クラブの正確な飛距離を、把握できていないゴルファーは意外に多い。ラウンド前にその日の飛距離、球筋の傾向を把握して、自分のスイングを見直すことが出来るのはありがたい。使用料は24球で550円。朝の調整にはちょうどいい球数でもある。

またホールアウト後、ラウンド中

で生まれた課題を即座に修正することは上達への早道。ツアープロたちには当たり前の方法だが、アベレージゴルファーともなれば疲れもあり、クラブハウスと練習場への距離が離れていけばそういう気分にもなりにくい。だがクラブハウス内であれば、帰りに「ちょっと打っていかか」という気分にもなる。

ゴルフ界のすそ野を広げる役割も

実はこのシミュレーターには、別の使い道も生まれている。ビギナーにバーチャルのラウンドを体験してもらい、技術だけでなくルールやマナーも勉強してもらおう。そのうえでリアルなラウンドに移行するというプランだ。建物に例えれば1階が練習場で、2階がゴルフ場とすれば「中2階」の役割を演じるのがシミュレーターという考え方。これがうまくいけば、ゴルフ人口の増大に大きく貢献できそう。

その大きなテーマに取り組もうとしているのが栃木で3コースを展開する鹿沼グループ。鹿沼72カントリークラブのコンパルムを改造して、シミュレーター2台の導入を決定。

8月のグラウンドオープンに向けて準備している。

鹿沼72の場合、屋外に300坪・20打席の練習場がある。にもかかわらず、わざわざシミュレーターを導入するという。その意味は、どこにあるのか。鹿沼グループの福島範治社長がその意図を明かしてくれた。

「U35(アンダーサーティーファイブ)会員制度」を新設して、今会員が1200人います。元は500人だったのですが、コロナ禍で倍に増えました。これは35歳以下の、上達したいと願うすべてのゴルファーのためのお得な制度です。現在の実力は問いません」。

当然、会員の中にはクラブを握ったばかりのゴルファーもいる。実はその会員たちにこそ、シミュレーターの持ち味が発揮されるといえる。「この希望の方には、マナーが学べるレクチャーがあります。まずシミュレーターでゴルフに慣れてもらって、コースデビューに備えてもらう」(福島社長)。

コロナ禍において、ゴルフ界でも明るい話題といえば、30代以下の若い世代が感染リスクの少ないレジヤーとしてゴルフを始めたことだが、その一方で、クローズアップされて